

中等教育研究開発室年報 第36号（2023年3月31日発行）別冊電子版
2022年度 授業実践事例

公民科（公共） 高等学校第Ⅰ学年

公共的な空間における人間としての在り方生き方
（生命倫理「人工妊娠中絶の是非について考える」）

授業者 阿部 哲久

（教育研究大会 公開授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校 公民科（公共） 学習指導案

指導者 阿部 哲久

- 日時** 令和4年11月26日（土） 第1限 9:30～10:20
- 場所** 第1社会科教室
- 学年・組** 高等学校I年1組41人
- 単元** 公共的な空間における人間としての在り方生き方
（生命倫理「人工妊娠中絶の是非について考える」）
- 目標**
1. 選択・判断の手掛かりとなる考え方を活用するとともに、自分自身の人間としての在り方生き方について探究することの意義について理解する。
(知識及び技能)
 2. 倫理的価値の判断において、選択・判断の手掛かりとなる考え方などを活用し、自らも他者も共に納得できる解決方法を見いだすことに加えて、自分自身の人間としての在り方生き方について省察する。 (思考力, 判断力, 表現力等)
 3. 多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される, 現代社会に生きる人間としての在り方生き方についての自覚を深める。 (学びに向かう力, 人間性等)

指導計画（全3時間）

第一次 課題の提示・論点整理 1時間

第二次 合意を視野に入れた議論と自己省察 2時間（本時 1/2）

授業について

学習指導要領では、「公共的な空間における人間としての在り方生き方」における知識及び技能の目標として、「帰結（帰結）主義」や「義務論」の考え方を理解させることを（ア）として示した上で、「（ア）に示す考え方を活用することを通して、行為者自身の人間としての在り方生き方について探求することが、よりよく生きていく上で重要であることについて理解すること」と示している。しかし、（ア）は「選択・判断の手掛かりとなる考え方」であり「正しい」選択のための「社会のための哲学」として重要ではあるが自身の人間としての在り方生き方についての「善さ」の探求＝「私のための哲学」とは異なる。本授業では、「人工妊娠中絶の是非」の議論を通じて、多様な在り方生き方を知り尊重することを『学ぶ』と同時に、自身の在り方生き方を『探す』ための手立てを検討する。

題目 人間としての在り方生き方を『探究』する『公共』の授業モデル

本時の目標

1. 選択・判断の手掛かりとなる考え方を適切に用いる。(知識及び技能)
2. 自身の人間としての在り方生き方について省察する。(思考力, 判断力, 表現力等)

本時の評価規準（観点／方法）

1. 選択・判断の手掛かりとなる考え方を適切に用いている。
(知識及び技能／ワークシート, テスト（後日）)
2. 合意にむけた選択・判断と自身の人間としての在り方生き方をそれぞれ考えている。
(思考力, 判断力, 表現力等／ワークシート, テスト（後日）)

本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
<p>○前時までの学習の確認</p> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">人工妊娠中絶について、どのような制度を選択すべきか。</p> <p>○公共道徳（「社会のための哲学」）にもとづく選択・判断</p> <p>○実践的な私的道徳（「私のための哲学」）の探究</p> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-bottom: 5px;">感情移入する</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-bottom: 5px;">比較する</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">磨く</div> </div> <p>○公共道徳（「社会のための哲学」）にもとづく選択・判断の再検討</p>	<p>○多様な人々の立場を想定した上で、『功利主義』や『義務論』などを用いながら『「正しい」選択』をめざして議論する。</p> <p>○特定の設定にもとづく資料を読む。</p> <p>○それぞれの当事者ならどう行動するのが「善い」「善かった」か、『「善い」選択』について自分なりに検討し、それぞれの判断を交流する。</p> <p>○『「善い」選択』ができない状況の可能性について検討し、交流する。</p> <p>○「善さ」についての議論をふまえた上で、再度、「正しい」選択をめざして合意を視野に入れた議論を行う。</p>	<p>○生命を扱う内容であることについて、各生徒・家族などには様々な状況がありうることをふまえ、あえて議論することの意義について確認するとともに一定の配慮をもって議論に向う必要があることをおさえる。</p> <p>○「善い」という意味については、「善き人であればするはずのことは何か」という視点から考えさせる。（『徳倫理学』の視点）</p> <p>○自分自身の「善さ」の探究とともに、「善く」できない状況についての「想像力」を持つよう働きかける。</p> <p>○私的道徳と公共道徳とを混同しないようおさえる。</p> <p>○議論は次時に継続し、「暫定的な合意」と、自分自身の判断について省察を行う。</p>
備考		

参考文献

- 赤林 朗、『入門・医療倫理 I（改訂版）』、勁草書房、2017
- 江口 聡 編、『人工妊娠中絶の生命倫理 哲学者たちは何を議論したか』、勁草書房、2011
- 児玉 聡、『マンガで学ぶ生命倫理』、化学同人、2013
- メアリー・ノーウォック、『考えるあなたのための倫理入門』、春秋社、2022

実践上の留意点

本授業は、新科目「公共」の内容A「公共の扉」における「選択・判断の手掛かりとなる考え方」の習得に関わる課題（図1）に対して、例示されている帰結主義と義務論に加えて徳倫理を導入することで改善をはかった「人工妊娠中絶の是非について考える」という3時間の単元の一部である。公共の扉の学習を終えた後に行い、「選択・判断の手掛かりとなる考え方」への理解をより深め、有意義に活用できるようにさせることを意図している。単元全体の指導案等詳細については、「公共」の授業モデルとして別途本校紀要に掲載しているので参照されたい。

- ①生徒は直観的判断の影響を大きく受ける。
- ②功利主義、義務論などの倫理理論の理解が難しい。
- ③直観の裏付けのために倫理理論を安易に「当てはめ」てしまいがちである。
- ④生徒自身の道徳的基準によって多様な立場の人を評価してしまい、倫理理論を用いた思考に至らない。

図1 「選択・判断の手掛かりとなる考え方」の習得に関わる課題

人工妊娠中絶については、2022年にアメリカの最高裁判所が49年ぶりに判断を変更したことから社会的にも関心が高まっている。生命倫理に関わる問題として、大きくは、胎児の生命と女性の選択の権利の対立、という論点から語られることが多い。ごく素朴な解釈に基づいて「当てはめ」るなら、女性の幸福を重視する功利主義か、胎児の生命を尊重する義務論かという「当てはめ」はできなくはないだろうが、女性の選択権による幸福に対して胎児の死という究極の苦痛を考慮に入れたとき功利主義的な判断が可能であるとは容易には言い難い。生命の尊重を義務ととらえても胎児の生命と母体の生命の選択を求められたらどうすれば良いのかという問題も生じる。そもそも、相容れない二つの価値に基づく主張を功利主義と義務論に割り振って議論することに意味があるとはいえない。「選択・判断の手掛かりとなる考え方」を学んだ後、最も危ういのは主張を功利主義や義務論に「当てはめ」て議論することである。そこで「徳のある人だったらどうするだろうか？」という問いを投げかけた。

生徒からは「何を『徳』と考えるかは個人によって異なるのではないか」「個人の直観に基づく道徳的判断と『徳』の違いが分からない」といった質問も出た。自分の意見があくまでも直観から始まっていることを理解しているからこそ出てくる質問であるが、「徳」をどうとらえるかについてはもう少し丁寧な説明が必要であった。倫理理論としての徳倫理では社会に共有されるべき「善さ」について追究するものであるが、本実践においては特定の「善さ」を厳密に探させるのではなく「自分にはできそうにないが『善い』と思うこと」をイメージするように返していった。また、本校研究大会での公開時には、「生徒が多くの状況を検討しようとしすぎているのではないか、場面を絞って提示した方が良いのではないか」という意見も頂いた。これについては、事後評価では多様な立場を考えることができたことに多くの生徒が価値を見出していた記述などから、場面を限定して示すことによって考えやすくすることと、多様な状況を考えにくくなる可能性とのトレードオフについて、慎重に検討する必要があると考える。